教員免許状更新講習における「現代的なリズムのダンス」の指導方法の検討：受講者の記述から課題を探る

Considering Teaching Method of “Modern Rhythm Dance” on Certificate Renewal Course: Looking for a Problems from Participant’s Description

キーワード：動きの習得、動きの発展、発表、交流、音楽の活用、達成感・有能感

長谷川　千里

HASEGAWA Chisato

Ⅰ　緒言

学習指導要領における「体育」のダンス領域は、平成10（1998）年の改訂でそれまでの「創作ダンス」、「フォークダンス」に加えて、新たに「現代的なリズムのダンス」が導入された。学習のねらいは、中学校では「リズムの特徴を捉え、変化のある動きを組み合わせて、リズムに乗って全身で踊ること」[1)]、高等学校では「リズムの特徴を強調して全身で自由に踊ったり、変化とまとまりを付けて仲間と対応したりして踊ること」[2)]と示されている。その指導に際しては、「一人一人の能力を生かす動きや相手と対応する動きなどを取り入れ」て仲間とかかわりをもつことや、「簡単な作品を見せ合う発表」、「一緒に踊り合う交流の活動」などが例示されている[2)]。しかし、先行研究によると、学習指導要領解説の内容に反して、教師の一斉指導による既成技術や作品の教授に留まった授業、映像資料等を用いて既成作品を模倣させるだけの放任授業が見受けられ、充実した実施状況ではないことが報告されている[4) 6)]。

また、体育科教育の多くの領域では、技術習得、勝敗、記録、ルール等により、評価基準が明確に定められている一方、ダンス領域は明確な評価基準がなく、そこに指導の難しさがあるといえる。他の領域とは異なる性質を有するダンス領域では、その授業内容や展開方法は教員に任されており、特にダンス経験の乏しい教員にとっては、不安を感じるケースも少なくないと考える。

このような状況の中で、新たに加わった「現代的なリズムのダンス」の望ましい指導方法を提示することが課題であるといえる。この課題を解決する方策の一つとして、全国で研修会や講習会が実施されている。「教員免許状更新講習」もその一つになり得るといえよう。

平成21（2009）年に導入された教員免許更新制により、教員は「教員免許状更新講習」を受講することが義務づけられた。この制度は、「その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けること」を目的としている[3)]。本学でも例年、「教員免許状更新講習」を実施しており、筆者は、実技科目「現代的なリズムのダンス」を担当している。

本研究では、「教員免許状更新講習」受講者から得た意見をもとに、「現代的なリズムのダンス」の講習内容の評価を行うとともに、今後の課題を検討することを目的とする。本研究で得られた知見を、今後の指導の一助としたい。

Ⅱ　方法

1．調査方法

平成28年度及び平成29年度に本学において実施された「教員免許状更新講習」の実技科目「ダンス（現代的なリズムのダンス）」（以下、本講習と略す）の受講者87名のうち、無回答者を除く、中学校および高等学校（中高一貫校を含む）教員65名を対象とした。

本講習終了後の修了認定試験において、「今回の講習を現場でどのように活用できるか」を自由記述してもらい、その意見を収集した。収集した意見は、その文脈からカテゴリー化・集計を行い、傾向を明らかにした。

記述内容を本研究において使用する旨、受講者の同意を得た。また、本学研究倫理審査委員会による承認を得た（研倫審・平29-22号）。

2．講習内容概要

本講習の所要時間は1時間10分であり、その中で（1）実技：ウォーミングアップ、（2）実技：指導事例、（3）講義：実技内容の解説と展開方法等の提案を行った。

（1）実技：ウォーミングアップ

ウォーミングアップでは、身体各部位のストレッチング、身体部位（頸部、胸部、腰部）をそれぞれ前後･左右にずらしたり、回旋させたりするアイソレーション、ダウンやアップのリズムを取る内容を行った。

（2）実技：指導事例

ここでは、単なるステップや振付の習得ではなく、筆者自身が振り付けたダンスを通して、次の①～⑤の方法を事例的に展開し、指導方法の提案を行った。筆者が振り付けたダンスの概要は表1の通りである。

①振付の構成方法

現代的なリズムのダンスで使用する音楽は、「前奏→A→B→C→A→B→C→ラスト」のように明瞭な構成のものが多い。音楽構成が明瞭であれば、音楽全体をとらえることが容易になるため、音楽選定の一つの基準になると考える。振付を構成する際、

表1：振付の内容

振付パターン	振付内容（ステップ等）	2人組で行える工夫（対面で行うための工夫）	音楽を活かした振付
パターン1	横方向への軽いジャンプとパンチ		
	Vステップ（変形）と手拍子	Vステップ（変形）の際の手の動きが対面者と合う	
パターン2	ポーズ（創作）	2人組でポーズを創作する	音楽に掛け声が入っており、ポーズのきっかけとなる
	後方へのジャンプとターン	ターンの際に互いの手をタッチする	音楽に掛け声が入っており、ジャンプのきっかけとなる
	スライド	位置交換	
	ウォーク＆ラン		音楽の盛り上がりに向けて、ウォークからランへと動きが変化する
パターン3	ダウンとジャンプ	ジャンプの際の手をハイタッチする	音楽の盛り上がりで跳躍的な振付を用いる
	パドブレ		
パターン4	サイドステップ（変形）	サイドステップの際の手の動きが対面者と合う	
	スリーステップターン		歌詞に合わせた振付

音楽構成に合わせる、つまり、「Aのメロディーでは Aの振付」とすることで、振付全体をとらえやすくなる。本講習でも、音楽の選定と振付構成はこの方法を用いた（表2）。

②振付の習得方法

振付を覚えることは難しいという意識が、ダンスに対して苦手意識を感じる一つの要因であると考える。振付習得を容易にする、もしくは意欲的に取り組めるような方法の一つの事例として、本講習では、2人組で振付を習得する方法を用いた。具体的には、「Aの振付はAさんと、Bの振付はBさんと一緒に覚える」というように、A、B、Cという振付を別の相手と習得させ、その人の顔を見ると振付が想起しやすくなるといった方法である。この方法を用いるため、振付は、2人組で行うと位置交換ができたり、互いの手を合わせることができるよう、2人組での良さが味わえるようなものにした（表1参照）。また、この方法を用いることで、教えあったり、一緒に練習したりと主体的な練習活動へと展開できるのではないかと考える。

③音楽を活かした振付方法

音楽構成以外にも、音楽の変化（曲調、抑揚、盛り上がり等）やメロディーラインをとらえた振付、歌詞の内容をイメージした振付にすることにより、ダンスの独自性が生まれるとともに、振付習得の助けになると考える。本講習でも、音楽の盛り上がりでは跳躍的な振付を用い、抑揚や歌詞を意識した振付を用いた（表1参照）。

④達成感・有能感につなげていく

①～③の方法によって、振付を習得することが容易となれば、「1曲を踊りきることができた」という達成感、有能感に繋がると考える。達成感や有能感は次の取り組みへと発展させるために重要な要素であると考えられるため、様々な場面で達成感や有能感を味わう経験をさせることが良いのではないかと考える。

⑤動きのアレンジ方法

体の向きを変化させて踊る、ユニゾンやカノン、シンメトリー等を用いる、2人組や集団で踊ってみる等、簡単なアレンジによって、土台となる一つの動きが様々に発展できることを伝え、実践を通して、その方法を提示した。

（3）講義：実技内容の解説と展開方法等の提案

講義では、指導事例（実技）で行った①～⑤の方法について解説するとともに、本講習内容をどのように各学校の実態に合わせていくか、どのように発表まで展開していけるか等、その方法を提案した。

表2：音楽構成と振付パターン

	音楽パターン	振付パターン 1	2	3	4	5	6	7	8
1	前奏								
2									
3									
4									
5	サビ	パターン3							
6									
7		パターン3							
8									
9		パターン4							
10									
11		パターン3							
12									
13	間奏								
14	Aメロ	パターン1							
15									
16		パターン1							
17									
18	Bメロ	パターン2							
19									
20									
21									
22	サビ	パターン3							
23									
24		パターン3							
25									
26		パターン4							
27									
28		パターン3							
29									
30	間奏								
31	Aメロ	パターン1							
32									
33		パターン1							
34									
35	Bメロ	パターン2							
36									
37									
38									
39	サビ	パターン3							
40									
41		パターン3							
42									
43		パターン4							
44									
45		パターン3・ポーズ							
46									

Ⅲ　結果

本講習受講者の意見を収集し、その文脈から1. 授業の実態や教員の意識、2. 本講習に対する意見という2つのカテゴリーに大別した。

さらに、1. 授業の実態や教員の意識は、「授業の実態」、「教員の意識」の2つのカテゴリーに分類し、集計を行った。2. 本講習に対する意見は、「振付の構成方法」、「振付の習得方法」、「音楽の選定・活用方法」、「動きのアレンジ方法」、「授業の展開方法」、「楽しさや喜びを味わう･交流できる授業」、「活用の可能性」、「その他」の8つのカテゴリーに分類し、集計を行った（図1）。

1．授業の実態や教員の意識

1−1．授業の実態

現在、「現代的なリズムのダンス」で行われている授業内容および生徒の実態に関する記述は18件（27.7％）であった。

授業内容では、基本ステップや振付の習得から、グループでの創作活動、発表へと展開させていく実践例がみられた一方で、「TVやDVDで見たものを生徒（で好きな子）が真似してみんなに教える」、「映像を使っての授業が中心になってしまう」といった既成の踊りの模倣に留まってしまっているケースもみられた。

生徒の実態では、ダンスに興味・関心を持っている生徒がいるという意見と、ダンスが得意・好きという者と苦手・嫌いという者の二極化が目立つという意見がみられた。

1−2．教員の意識

教員自身がダンスに苦手意識を持っているという記述が8件（12.3％）みられたが、「ダンスが苦手なので、映像を使っての授業が中心になってしまうが、工夫すれば様々なことができそうだ」、「基本的な現代リズムの取り方は苦手ですが、今回の内容であれば、自分も恥ずかしがらずに、生徒も喜んで取り組んでくれると思った」というような前向きな記述が多かった。

2．本講習に対する意見

2−1．振付の構成方法

振付の構成方法に関する記述は11件（16.9％）であり、「サビ、Aメロ、Bメロで分けるのは分かりやすくて良い」、「音楽のAメロ、Bメロで踊りの振付を同じにすることで覚えやすい」、「動作のパターンを教えると取り組みやすい」という意見がみられた。

2−2. 振付の習得方法

振付の習得方法に関する記述は17件（26.2％）であり、「踊りの種類ごとに2人組の相手を変え、「この踊りはこの相手」と覚えながらできるのは非常にわかりやすく、授業の中でもぜひ活かしていきたいと思った」、「基礎の練習が単調になりやすいので、ペアなどで踊りながら身につけると楽しみながらできると感じた」、「動きがA・B・決めポーズとあり、複数回、繰り返すことで覚えやすかった」という意見がみられた。

2−3．音楽の選定・活用方法

音楽の選定方法や活用方法に関する記述は14件（21.5％）であり、「曲選びはとても重要なポイントだと改めて実感した」、「生徒が関心を持てるような選曲をして指導していく」、「身近な曲にすることで生徒もやる気が出てきて楽しく活動することもできる」といった音楽選定のポイントに関する意見や、「どんな曲にも応用できると思った」、「音楽、ペア（グループ）、振付をリンクさせて生徒たちで作ったり、考えるダンスの授業を行いたい」といった本講習を発展させるような意見がみられた。

2−4．動きのアレンジ方法

動きのアレンジ方法に関する記述は10件（15.4％）であり、「テンポをゆっくりにしたり、動きを少し簡単にすれば使えるものがたくさん得られた」、「振付を簡単なものに変える」といった生徒の実態や個々のレベルに合わせて動きを変えていく方法や、「同じ動きでも向き合ってやるだけで感じが違うものにもなる」、「隊形を変えて行ってみたい」といった一つの動きを発展させていく方法等の意見がみられた。

2−5．授業の展開方法

授業の展開方法に関する記述は25件（38.5％）であり、本講習の内容をどのように授業で展開していくかについて、その具体的な方策がみられた。

その内容は、「クラスを何グループかに分けて、それぞれ1曲ずつ発表するではなく、それぞれのグループの作品を全てつなげてクラスで1曲を仕上げるというのもよいのかと思った」といった発表形式を発展させるような工夫、「ベースのダンスを教えた後、ステップや手の振り、隊形など、生徒にアレンジさせてみるのも良いと思った」、「工夫できる場面設定により、思考的な活動も入り、ただ踊るだけではなく活動の工夫ができるリズムダンスをやってみたい」といった生徒が主体的に取り組める工夫、「同じ曲でもテーマを持ち、表現していく」、「他のグループを見て表現の面白さに気づかせる」、「生徒同士で表現法を変えたり、人数を増やしたりするように課題設定を毎回変えることで、自然に一つのフレーズやダンスから、グループ化したときの豊かな表現や工夫を身につけていけると感じた」といった表現に繋げる工夫等がみられた。

2−6. 楽しさや喜びを味わう・交流できる授業

踊る楽しさや喜びを味わう・交流できる授業に関する記述は19件（29.2％）であった。

踊る楽しさや喜びを味わう授業では、「楽しく明るい笑顔で行えるのが一番であると感じたので、その点を中心におき指導したい」、「難しい動きでなく、生徒が体で感じ、楽しい気持ちを持てるように工夫したい」、「生徒が楽しくリズムにのって、体を動かすダンスをしたい」という意見がみられた。

交流できる授業では、「動きをペアで行うことで、コミュニケーションも取れるので良いと思う」、「仲間とコミュニケーションをとったりしながら、ダンスの楽しさを伝えていきたい」、「生徒同士でコミュニケーションをとったり、思いやりにもつながると思ったので、授業で試したい」といった生徒間のコミュニケーションに関する意見、「パートナーを変えることで、お互い振付の確認をし合えたり、自然と協力できることが、とても良いことだと思った」、「個人、グループを上手に組み合わせることで生徒達が主体的に取り組んでいける授業になると思った」といった生徒の主体的な学びに関する意見がみられた。

2−7. 活用の可能性

本講習内容について、現場での活用の可能性に関する記述は30件（46.2％）であり、本講習の内容を「授業に取り入れてみたい」、「授業に活かしていきたい」、「授業で試したい」、「多くのヒントを得られた」という意見がほとんどであった。

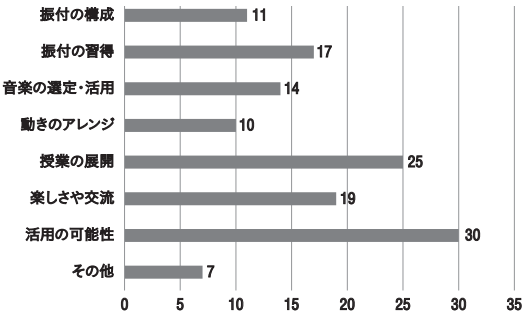

図1：本講習に対する意見

Ⅳ　考察

1. 授業の実態や教員の意識

本講習受講者の意見を集約した結果、生徒の実態としては、ダンスに興味・関心を持っている生徒がいるという意見がみられた。先行研究においても、「現代的なリズムのダンス」は男女ともに生徒の興味関心が高いことが報告されている[4) 6)]。一方、ダンスの好嫌の二極化が目立つという意見もみられた。しかし、「現代的なリズムのダンス」は恥ずかしがらないで取り組める内容であることから、「創作ダンス」や「フォークダンス」に比べて実施率が高いことも報告されている[6)]。

「現代的なリズムのダンス」は、その実施率は高いものの、本研究において、ダンス指導に苦手意識、不安を感じている教員がいることも明らかとなった。ダンス指導に対する不安に関して、現職中学校教員111名を対象とした調査[10)]では、61名（55.0％）がダンス指導に対して不安を抱えていることが明らかにされ、不安を感じる具体的な内容は、「自身のダンス技術に関する不安」、「ダンスの知識不足に対する不安」、「自身が師範することに関する不安」であった。また、ダンス授業の実施状況等について、東京都公立中学校227校（637校のうち、回答のあった中

学校）を対象とした調査[6]では、ダンス指導の問題点として、「実技経験・指導経験がなく指導に自信がない」、「専門でない教員にはダンス指導は難しい」、「運動技能・表現技法など的確な助言ができない」、「ダンスは他の競技種目と違い到達目標が一定ではないので評価が難しい」といった実技経験不足、指導経験不足、知識や技術不足、他の領域とは異なるダンス領域の性質に関する難しさが挙げられていた。このようなダンス指導を行う教員の状況から、ダンスの授業内容が「既成の踊りの模倣に留まってしまう」ことに繋がっていると考えられる。中村[4]も指摘するように、「現代的なリズムのダンス」では、「映像資料による既成作品の模倣」の定形型運動習得学習が多く展開されており、本来の意図としている非定形型の創出学習が行われていないことが分かった。さらに、「現代的なリズムのダンス」を通して、生徒が主体的に活動することを目的としながら、ダンスの得意な生徒がグループをまとめていくような、生徒に「丸投げ」の授業を行っている教員がいることも分かった[4]。

これらのことから、ダンスに興味・関心を抱く生徒が増え、「現代的なリズムのダンス」を取り入れる学校が増加している一方で、教員は実技経験、指導経験、知識・技術不足を感じていることが分かった。そのための「現代的なリズムのダンス」の指導方法、展開方法を提示していく必要があると考える。本講習受講者の中でダンスに苦手意識を感じていた者が、「踊るのは難しいと感じていたが、授業内での実施が可能だと思った」、「ダンスが苦手だが、工夫すれば様々なことができそうだ」という前向きな意見を述べていたことから、本講習受講により、何らかの指導方法のヒントが得られたのではないかと考える。

2. 本講習に対する意見

本講習では、①構成方法、②習得方法、③音楽を活かした振付、④達成感・有能感、⑤動きのアレンジ、これらの展開方法について、実技と講義によって、その事例を示した。これらを通して、本講習で意図したことは、「現代的なリズムのダンス」を指導するにあたり、指導不安を感じている教員を含め、指導に携わる教員が、現場で活用の可能性を見出せる方法を提案することである。具体的には、次の1）～4）の4つの観点で本講習を構成した（図2）。

1）振付構成と音楽、及びその助言について

この観点は、「選曲と振付の構成」、「動きと音楽の調和」、「動きの創出、創作における助言」についてである。どのような音楽を選び、どのように動きを構成していけばよいか（あるいは、生徒にどんな音楽を選ばせ、動きを構成させるか）、どのように動きと音楽を調和させていくか、生徒に即興的な動きや振付を考えさせる上でどのように助言していくかについて提案したものであり、「①構成方法」、「③音楽を活かした振付」で示したつもりである。

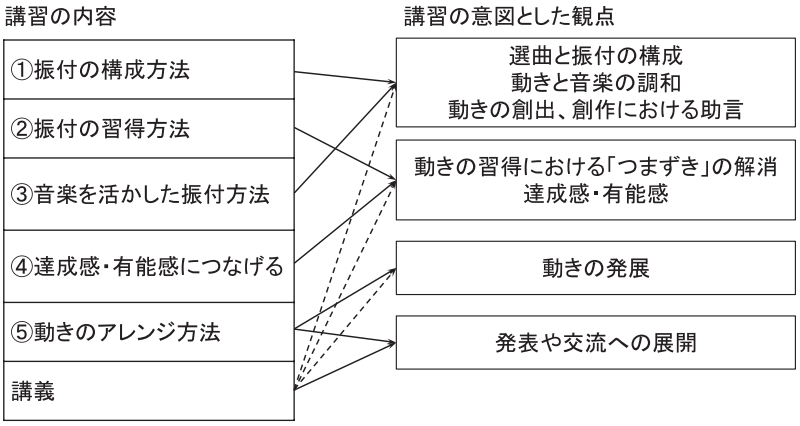

図2：講習内容と講習意図の観点との関連

受講者の意見から、音楽構成に合わせた振付にすることで、分かりやすさ、習得しやすさに繋がる記述がみられたこと（11件、16.9％）、音楽選定のポイントに関する記述、振付構成に関連付けた音楽の選択に配慮するような記述がみられたこと（14件、21.5％）から、「選曲と振付の構成」について、講習の意図が伝わった受講者がいたことがうかがえる。しかし、「動きと音楽の調和」や「動きの創出、創作における助言」に関する記述がみられなかったことから、本講習では、動きと音楽をどのように調和させていくかという方法や、生徒に即興的な動きを創出させたり、動きを創作させる際の助言に繋がるような内容は伝わっていなかったと考えられる。

2）動きの習得における『つまずき』の解消

この観点は、「動きの習得における『つまずき』の解消」、「達成感・有能感」についてである。どのように動きの習得における「つまずき」を解消させられるか、また、「つまずき」を解消した上で、達成感や有能感を得るためにはどうしたらよいかについて提案したものであり、「②習得方法」、「④達成感・有能感」で示したつもりである。

本講習では2人組で振付を習得する方法を用いた。受講者の意見から、習得しやすさに繋がる記述がみられたこと（17件、26.2％）から、講習の意図が伝わった受講者がいたことがうかがえる。達成感や有能感に関する記述は見られなかったが、本講習受講者の中でダンスに苦手意識を感じていた者が、前向きな意見を述べており、本講習において何らかの達成感や有能感等に繋がったのではないかと考える。さらに、「現代的なリズムのダンス」を取り組むことのできる単元としてとらえることができたのではないかと考える。

3）動きの発展の仕方

この観点は、「動きの発展」についてである。即興的な動きや創作した動きの組み合わせをどのように発展させられるのかについて提案したものであり、「⑤動きのアレンジ」で示したつもりである。

本講習では、土台となる一つの動きが様々に発展できることを実践を通して提示した。受講者の意見から、同じ動きでも向きや人数を変えることで変化が生まれるといったような記述がみられたことから、講習の意図が伝わった受講者がいたことがうかがえる。しかし、本講習で意図したことは、筆者自身が振り付けたダンスを通して、指導方法の提案を行うことであったが、本講習を単なるステップや振付の習得のようにとらえていた受講者もいたことが、記述内容からうかがえた。

4）発表や交流への展開

この観点は、「発表や交流への展開」である。学習指導要領解説に示されている「発表」や「交流」に繋げていくためにはどうしたらよいかについて提案したものであり、「⑤動きのアレンジ」や講義において示したつもりである。

受講者の意見から、本講習をどのように展開していくかについて、その具体的な方策がみられるとともに（25件、38.5％）、発表につなげていくような記述が多くみられた。また、生徒間のコミュニケーションに関する記述がみられたことから、講習の意図が伝わった受講者がいたことがうかがえる。また、生徒間のコミュニケーションをとるような指導を行うことで、生徒の主体的な学びに繋がるといった記述もみられた。しかし、単に楽しさを感じられる授業内容を目指している受講者もみられた。学習指導要領に示されている「踊る楽しさや喜びを味わう」ところから、「それぞれ特有の表現や踊り」を通して、「交流や発表」に発展できるように授業展開を立案する方法を示す必要があったと感じた。

本講習全体を通して、現場での活用の可能性を示していた記述がみられたこと（30件、46.4％）から、本講習において、現場での授業実践に何らかの形でヒントを与えられたのではないかと考える。しかし、前述したように、本講習を単なるステップや振付の習得のようにとらえてしまっているような受講者がみられたことから、本講習で習得した振付をそのまま、現場の授業で行っては、中村の指摘[4]のように、中学校学習指導要領解説に示されている「既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではない」[1]という内容とは反して、既成作品の模倣になってしまうことが危惧される。

3. 本講習の評価と課題

受講者の意見を集約した結果、本講習においては、4つの課題が挙げられる。

一つ目の課題は、動きと音楽を調和させていく方法についてである。「現代的なリズムのダンス」では、リズムの特徴ととらえたり、強調して踊ることが必要であり、そのリズムを掴むために音楽の使用が非常に効果的である。また、作品としてまとめ、発表につなげていく際には、必ずと言っていいほど音楽が使用される。音楽のリズムをとらえて、強調して踊るためには、その音楽独自の音楽変化（曲調、抑揚、盛り上がり等）や、メロディーラインをとらえ、動きを導いていくことが必要であると考える。また、それによって踊りも特徴あるものになっていくと考える。そのため、どのように動きと音楽を調和させていくか、その方法をより明確に提示し、説明する必要があったといえる。

二つ目は、動きを創出したり、創作する際の助言についてである。生徒たちが全身で自由に踊ったり、動きをまとめる過程において、教員の助言は生徒の活動を円滑にする指針となる。どのような助言をすれば、生徒が主体的に活動することができるのか、その視点からの説明が必要であったといえる。

三つ目は、交流や発表への展開についてである。踊る楽しさや喜びを味わうことは、ダンス領域にとって重要な内容であるといえるが、そこから交流や発表に発展させていくことで、互いのよさを認め合ったり、共感し高めあおうとする態度や、役割や責任を果たそうとする態度につなげていくことができると考えられる。そのため、交流や発表に発展できる授業展開の方法を具体的に提示することや、その意義を伝える必要があったといえる。

四つ目は、本講習を単なるステップや振付の習得のようにとらえていた受講者がいたことである。本講習の意図は、筆者自身が振り付けたダンスを通して、「現代的なリズムのダンス」の指導方法や展開方法を提示し、現場での活用の可能性を見出してもらうことであり、振付を習得してもらうものではない。本講習で習得した振付をそのまま現場の授業で行ってしまっては、既成作品の模倣にとどまった授業になってしまい、その後の展開が臨めないのではないかと考える。そのため、講習の意図を受講者に明確に伝えるとともに、授業の中でどのように展開していけるか、その方法をより具体的に提示する必要があったといえる。

Ⅴ　まとめ

本研究では、受講者の意見を集約することにより、「現代的なリズムのダンス」の授業の実態やダンスに対する教員の意識についての知見を得ることができた。また、現場での活用の可能性が示唆されるとともに、本講習の課題を確認することができた。そのため、本講習内容を見直し、改善していく必要があると考える。

本講習を通して、「現代的なリズムのダンス」のよりよい指導方法を提示していくことの必要性を改めて実感した。さらに、指導方法の提示だけでなく、生徒の実態にどのように合わせていけるのかや、ダンスに苦手意識を感じている教員の不安を解消し得る授業の進め方や展開方法についても検討していくべきだと考える。

今後、教員養成機関としての本学において、学生教育の充実を図るためにも、実践を重ねながら、研究を進めていきたいと考える。

Ⅵ　参考文献

1）　文部科学省（2017）：中学校学習指導要領解説, pp. 168–188
2）　文部科学省（2009）：高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編, pp.8 1–90
3）　文部科学省：教員免許更新制, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/（accessed 2017 Nov. 15）
4）　中村恭子（2013）：日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題, スポーツ社会学研究21（1）, pp. 37–51
5）　中村恭子（2010）：中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望 東京都公立中学校を対象とした調査から, 順天堂スポーツ健康科学研究1（4）, pp. 472–485
6）　中村恭子（2009）：中学校ダンスの男女必修化

の課題―中学校教員を対象とした調査にもとづいて―，順天堂スポーツ健康科学研究1(1)，pp. 27-39
7）中村恭子（2009）：中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容―平成29年度，20年度，21年度および24年度の年次推移から―，（社）日本女子体育連盟学術研究26，pp. 1-16
8）中村恭子，武井正子，浦井孝夫（2003）：「現代的なリズムのダンス」の実施状況と教員の意識に関する研究―教育目標と学習内容の検討―，日本体育学会第54回大会号，p. 616
9）東京都教育委員会（2011）：武道・ダンス・体育理論 指導事例集，まこと印刷，pp. 114-144
10）山口莉奈，正田悠，鈴木紀子，阪田真己子（2017）：体育科教員のダンス指導不安の探索的研究，日本教育工学会論文誌41(2)，pp. 125-135